国土交通省

清水港湾事務所　100年間の主要プロジェクト

清水港 石炭埠頭・村松埠頭の整備

(1952～1962)

戦後の経済復興により、静岡県内の産業は成長を続け、エネルギー源として石炭の需要が拡大しました。

当時の清水港には、石炭を荷揚げする岸壁や貯炭場が十分に確保されておらず、大量の石炭を拠点的に取り扱うための施設として、1952年(昭和27年)、石炭埠頭の建設工事に着手、1957年(昭和32年)に水深9m岸壁(現・富士見4～5号岸壁)が完成しました。

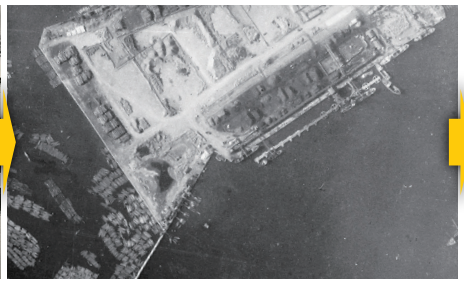
完成後、主に北海道や九州で産出された石炭を取り扱いましたが、1960年代に石炭から石油へのエネルギー転換が急速に進み、石炭の取り扱いは縮小しました。代わって、製紙原料の木材チップや飼料・食料用穀物の需要が増加するとともに、輸送船舶の大型化も進みました。

このため、1984年(昭和59年)から1990年(平成2年)にかけて、岸壁の改良工事(水深12mへの増深)を実施し、現在は、穀物・木材チップ・セメント等のばら積み貨物(バルク貨物)の受入拠点としての役割を担っています。(2015年から、老朽化対策のための改良工事を実施中)

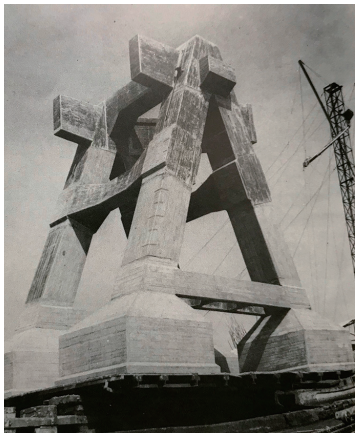
また、石炭埠頭の整備に続いて、主に食品の輸出や穀物の輸入増加に対応するため、1958年(昭和33年)から1962年(昭和37年)にかけて、村松岸壁(現・富士見6～7号岸壁)を整備しました。現在は、飼肥料や合板等が取り扱われています。

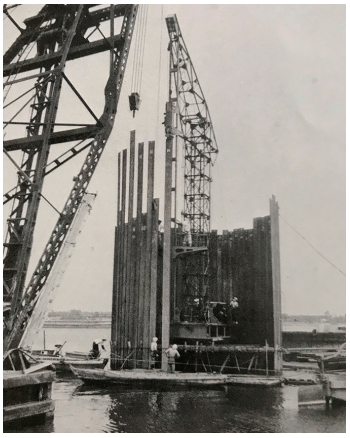
■主要施設／石炭岸壁(水深9m、延長115m×2バース) ※現在の富士見4～5号岸壁
村松岸壁第1バース(水深9m、延長173m) ※現在の富士見6号岸壁
村松岸壁第2バース(水深9m、延長156m) ※現在の富士見7号岸壁
■構造形式／石炭岸壁：A型脚構(第1バース)、円筒脚柱(第2バース)
村松岸壁：矢板式岸壁(上部桟橋式)
■事業期間／1952年(昭和27年)～1962年(昭和37年)
※その後、石炭岸壁については、1984年(昭和59年)～1990年(平成2年)に改良工事(水深9m→水深12mへの増深、構造を桟橋式に変更)を実施し、富士見4～5号岸壁(延長480m)となる

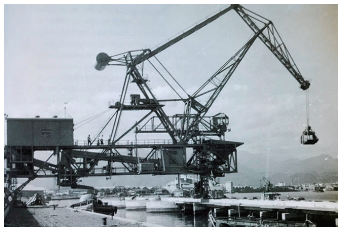
工事中の石炭岸壁
(1955年)


完成後の石炭岸壁
(1962年)

現在(富士見岸壁)
(2021年3月)


石炭岸壁 A型脚構本体の製作状況
(1953年)


石炭岸壁 円筒脚柱の鋼矢板打設工事
(1956年)


石炭岸壁に石炭荷役用アンローダー1号機を設置
(1958年)

石炭岸壁と貯炭場
(1960年)

村松岸壁 鋼管杭の打設工事
(1962年)

村松岸壁(現・富士見6号岸壁)に、清水港で初のフルコンテナ船「パシフィックバンカー」が入港
(1970年1月)

写真提供：静岡県、清水港利用促進協会、鈴与株式会社、清水埠頭株式会社